

チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立支援学校天王みどり学園 加賀谷 勝

「鬼は外、福は内は」魔法の言葉

まだ節分の余韻が残る幼稚園を訪問したときの「心に残ったエピソード」を紹介します。

〈「鬼は外、福は内」は魔法の言葉〉

- 友達とうまく関われない3歳児のM君。今日はM君が友達とお店屋さんごっこをしている場面に、鬼の面を付けた二人の男の子がやってきた。遊びを邪魔されたくないM君は、二人を追い払うために押してしまった。一人の男の子が倒れてしまったが、幸いにケガはなかった。数分後、また同じような場面。そのとき、そばにいた先生がM君にある言葉を耳打ちした。すると、先ほどは力任せに押していたのに、今度は「鬼は外、福は内」という言葉で男の子を追い払った。M君は腕力よりも、言葉で伝えた方が効果的なことを学んだ。たまたまうまくいったかもしれない。しかし、偶然を重ねれば必然になり、やがて当たり前に変わる。



〈子どもの得意なことが存在価値を高める〉

- 太鼓演奏がとても得意な4歳児のS君。今日も先生と一緒に作った太鼓に向かって、華麗なバチさばきを披露していた。3か月前よりも数段腕が上がっているばかりか、鬼の面を被り、踊りも加わっており、まさになまはげ太鼓シヨである。いつの間にかS君の周りに友達が集まり、「すごいね！」という歓声上がる。S君はこれまでクラスのみんなからからかわれるような存在だった。しかし、S君の好きな太鼓で活躍の場を増やすために、先生たちはなまはげ太鼓を研究したり、いい音が出る素材を工夫したりしてみんなが驚くような太鼓を作った。日に日に太鼓の腕を上げていくS君を見る周りの目が変わってきた。得意な太鼓演奏を通してS君の存在が大きくなった。



〈子どもの視線の先を見る〉

- 言葉でうまく自分の気持ちを表現できない3歳児のT君。今日は部屋のドアの上部分に付いている鍵に目がいった。それに気付いた先生が、T君を抱っこして鍵に触らせた。何度も鍵穴に棒状の物を入れたり出したりして遊ぶ。しかし、抱っこしている先生は疲れてくる。そこで先生が考えたのが椅子である。椅子に上がって夢中になって遊ぶT君に、先生は「棒が入ったね」と声を掛けていた。言葉が少ない発達段階であれば、子どもの視線の先にある事物に気付くことと、子どもがしていることを実況中継することが、子どもの言葉の発達を促す。また、子どものやりたいことをあれこれ考える先生の熱意と想像力が、子どもとの信頼関係を築き、成長を支える。

〈子どもの安全基地になる〉

- 3か月前に訪問したとき、ずっと先生におんぶをされていた3歳児のK君。今日は一度もおんぶされる場面がなく、先生から離れて一人でホールの中を走り回ったり、友達が作ったお家に入ったりしていた。時々、不安になる先生に駆け寄る。子どもは、うれしいときや困ったとき、見守ってくれている人の視線を期待して必ず振り返る。子どものやっている姿を見て、言葉を掛けたり、見守ったりして認めているというメッセージを送る。この積み重ねが子どもに安心感を与える。

今期のK君の目標は、「時間がかかっても一人で移動する」でした。K君の成長を伝えたとき、担任の先生が涙をこぼしていました。きっと悩みながら指導されていたと思います。大切なものは目に見えません。しかし、大切にしたいものは子どもの姿にちゃんと映ります。